

(指宿市十二町・湯の浜六丁目字摺ヶ浜)

位置と環境

南摺ヶ浜遺跡は、指宿市十二町及び湯の浜に所在する。遺跡は、指宿市の市街地海浜部に面した標高約8mの海岸段丘上にあり、山裾から海岸へと緩傾斜する火山性扇状地の端部に位置し、橋牟礼川遺跡の南東約500mにあたる。

調査の経緯

南摺ヶ浜遺跡は、昭和38年8月、ホテルの造成工事に伴い遺物が採集され、その存在が明らかになった遺跡である。

平成4年には、同ホテルの増改築工事中に成川式土器が発見され、市教育委員会により発掘調査が行なわれた。この時の調査で、古墳時代の土壌墓が3基確認された。

平成5年には、ホテルに隣接する社員寮建設予定地の発掘調査が行なわれ、宇宿上層式土器をはじめ縄文時代晩期の遺物が出土し注目された。

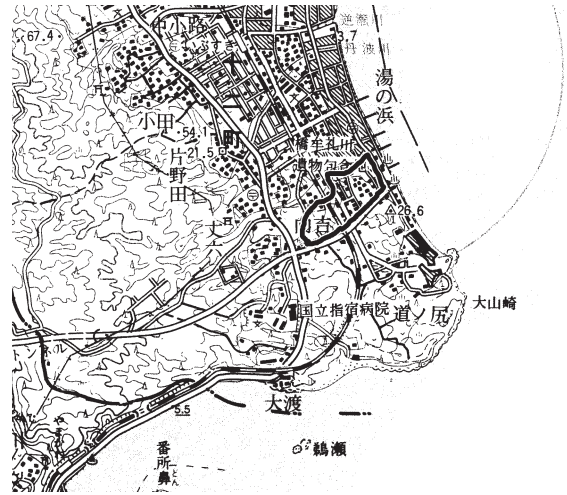
遺構と遺物

平成4年の調査では、3基の古墳時代の土壌墓が確認された。すでにホテルの増改築工事が進み、建物基礎のコンクリートパイルが打ち込まれた中での緊急調査であったため、調査は基礎工事が及ぶ範囲に留めざるを得なかった。

調査は、基礎工事が及ぶ部分について、A～Eの5か所のトレンチが設定され行なわれた。そのうち、Cトレンチから2基の土壌墓が、Dトレンチから1基の土壌墓が出土した。いずれの土壌墓も7世紀の第4四半期に堆積した開聞岳火山灰「青コラ」の下層から掘り込まれている。土壌墓の掘り込みは、調査区の土層断面の観察から、60cm以上の深さを図ることが確認できた。

Cトレンチでは、土壌墓に近接して、高杯や埴形土器、鉄鏝や軽石製品がまとまって出土した。これらの遺物は、墓壙外への副葬や墓域に供献された品々の可能性もある。また、Dトレンチの土壌墓には刀子が副葬されていた。

平成5年の調査地点は、土壙墓群が確認された地



第1図 南摺ヶ浜遺跡の位置



写真1 南摺ヶ浜遺跡の遠景

点から約40m西側にあたる。約15㎡の調査区からは古墳時代の柱穴8基と縄文時代晩期の遺物が出土した。出土した遺物は、上加世田式土器や夜臼式土器等の土器や石錘、石鏃、扁平打製石斧等の石器で、中でも南西諸島に見られる宇宿上層式土器が興味深い。

特徴

まず、第1に、南薩で4例目となった古墳時代の埋葬地遺跡であることが、本遺跡の特徴としてあげられる。山川町成川遺跡や枕崎市松之尾遺跡では、土墳墓が群を形成していることから、本遺跡においても墓域の広がり十分に予想される。なお、近接する橋牟礼川遺跡の古墳時代集落では、墓域が確認されていないため、両遺跡の関係についても注目されるところである。

平成10年の弥次ヶ湯古墳の発見で、指宿には、高塚古墳と土壙墓の2つの墓制があったことが明らか

になった。薩摩半島の古墳時代の墓制のあり方を考える上で、両遺跡の関連や位置づけを検討することが重要であろう。

第2に、縄文時代晩期の文化を知ることができる遺跡として重要である。宇宿上層式土器は、トカラ列島中之島付近を北限に沖縄本島まで分布する土器である。本遺跡で出土した宇宿上層式土器が、南西諸島からの搬入品か、当地で製作された土器かにわかに判別し難い。しかし、土器の胎土に着目すると、南西諸島の宇宿上層式土器に見られる白色粒子（石灰あるいは貝殻片？）がほとんど含まれていない点を重視すれば搬入品である可能性は低いと考える。いずれにせよ縄文時代晩期に南西諸島との文化交流があったことを物語る遺物であり、南部九州本土における南島土器の存在の可能性を大きく広げた発見となった。今後の資料の増加が期待されるとともに、大渡遺跡の尖底土器の存在も合わせて注意すべき資料である。

資料の所在

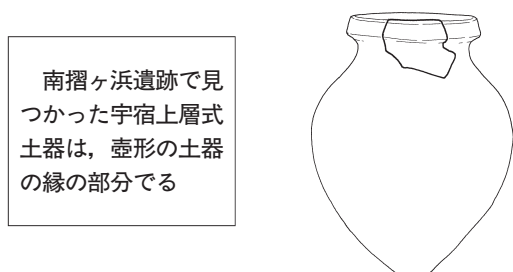
出土遺物は、指宿市考古博物館時遊館 CoCco はしむれに展示・保管されている。

参考文献

指宿市教育委員会1993「南摺ヶ浜遺跡Ⅰ」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』13

指宿市教育委員会1993「南摺ヶ浜遺跡Ⅱ」『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』14

（下山 寛）



第2図 土器片の位置



写真2 土墳墓検出状況（刀子が副葬されている）



写真3 土墳墓の近辺から出土した高杯

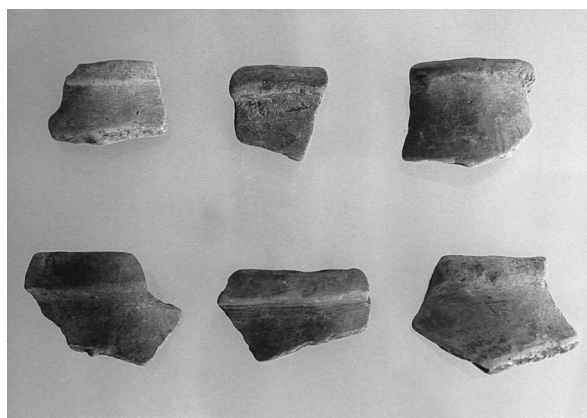


写真4 宇宿上層式土器（下段左隅のものが南摺ヶ浜遺跡出土。その他は奄美大島出土。）